

おふでさき 世界の歩く

第7回

山澤昭造

「やまざわ しょうぞう」
本部准員
天理教校本科研究課程主任

一号45—57

一号45—50
これがたしかなほんみちである

よろづよのせかいぢふうをみハたせば

みちのしだいもいろくにある (一) 45

このさきハみちにたとへてはなしする

どこの事ともさらにゆハんで (一) 46

やまさかやいばらぐるふもがけみちも

つるぎのなかもとふりぬけたら (一) 47

まだみへるひのなかもありふちなかも

それをこしたらほそいみちあり (一) 48

ほそみちをだんくこせばをふみちや

これがたしかなほんみちである (一) 49

このはなしほかの事でわなほに

神一ぢよでこれわが事 (一) 50

〈道にたとえて話す〉

45では、「親神様が人間をはじめだしてから今日



に至るまで、世界中を見渡してみると、「道の次第」もいろいろある」と言われています。「道の次第」とは、「人生の行路」を指します(※1)。人間が生きて歩んでいく道筋には、さまざまなことが起こってくるということです(※2)。

それを受けて46では、「この先は道にたとえて話をする」と言われています。これはどういうことかという、人が歩む道筋はいろいろかもしれないが、その中で、「陽気ぐらし」へと続く真実の通り方は、どのような生き方なのか、それを道にたとえて話をされるのです。

47から49にかけては、その真実の道について述べられています。すなわち、「山坂」や「茨のぐろう(叢草むら)」も「崖路」も、「剣の中」も通り抜けたら、まだその先には「火の中」もあり「渕中」もある。そして、それを越えていったら、ようやく「細い道」がある。そして、その細道をだんだんと一歩一歩越していく、その先について「大道」に出させていただくことができるのである、と。このように言われています。いずれの道中も、苦難の道ですが、このような道筋を通り越えていくところに、

「陽気ぐらし」へと至る「本道」、正しい筋道があると論されているのです。

この一連のお歌を読ませてもらうにあたっては、これらが記された当時の人々の生活習慣を頭に入れておくことが大切です(※3)。交通機関の発達した現代とは異なり、当時は、目的地まで歩いていった時代です。道路も整備されておらず、遠くへ行くには、山坂の多い峠道を越さねばなりませんでした。

「通り抜けたら」(47)「越したら」(48)という表現が使われていますが、坂道を越えてようやく峠にたどり着くと、その瞬間、視界が開け、これまでとは全く違った、見たこともない景色が広がっている。

特に、教祖は、まだ誰も往来したことがないところに歩いて道を付けようとされているのですから、苦勞を越した先にある、そこに飛び込んでくる光景は格別なものではないでしょうか。

そのような当時の時代状況を想像しながら、これらのお歌を読ませていただきたいと思います。

〈教祖が通られたをやる道〉

次のような「おさしづ」の一節があります。



いかなるも、茨畔も崖路も、剣の中も火の中も、
前々の理を以て説いたる処、見るも一つの道と
いう。(略) 難儀なをやの通りた理が分かれば
皆分かる。八方広がる。(明治22・8・4)

「茨畔も崖路も、剣の中も火の中も」というところが、
「おふでさき」第一号47—49のお歌を前提として
いることが分かります。そして、その道筋が、「を
や」(教祖)の通られた道であると論されています。
「おふでさき」第一号において「山坂や茨ぐるう」
から始まる一連の道中は、教祖の「ひながた」を象
徴的に表している、「をや」の道なのです(※4)。

(次ページコラム参照)

〈神一条でこれ我が事〉

50のお歌では、これまでの47—49のお歌を受けて、
「この今している話は、よそ事ではない。神一条で
我が事なのだ」と言われています。

ここで注意したい点は「神一条」という言葉です。
私たちは「神一条」という言葉を、「神一条の精神」
などの表現で、「人間から親神様への一筋の思い」
(人間↓親神様)といった意味で使用しています。

しかし、原典(特に「おさしづ」)を読ませていた
だと、「親神様から人間への一条の思い」「子供た
すけたい、可愛いとの一条の思い」(親神様↓人間)
といった意味で使われている例が多いことに気が付
きます。「神一条」という言葉には、二つの方向性
があるのです。

ですから、50の「神一条でこれ我が事」について
も、前者の意味ですと、「神一条に通る者は、これ
(この今している話)を我が事にとって思案せよ」
となりますし、後者の場合ですと、「神が子供可愛
い一条の思いからしていることであって、この思い
を我が事と思案せよ」というように解釈することが
できます(※5)。

いずれの場合であっても、親神を信じる人、この
道を通る人にとつて、今論している道筋の話は人ご
とではない。いずれの者も、この「ひながた」の道
を通らねばならない、通ってもらいたいと論されて
いるのです。

〈細道をだんだん越せば〉

「神一条でこれ我が事」と言われるように、これら



「をや」の道を論された例

のお歌は、神一条の道を進む者に対して、その道すがらを述べたものです。

それとともに、これまでのお歌の流れを考えると、

これらは、直接には、おちゑと音次郎を川原城（現在の天理市川原城町）に送り帰さねばならなかった秀司様に向けてのものではないかと思案します。

「おさしづ」だけでなく、先人が教祖からいただいたお言葉の中にも、一号47—49のお歌を前提として、教祖の「ひながた」を論されている例がみられる。

明治17、18年ごろのこと、梅谷四郎兵衛（のちの船場大教会初代会長）は、ある行き違いから「おやしき」のなかで孤立し、さらに講社の周旋や信者からも心が寄らず、講元として、思い悩んでいた。そうしたときに、教祖から、次のようなお言葉を頂戴した。（『船場大教会史』立教154年、97—98ページ参照）

明治十八年一月下旬 講元の事願
（略）それ元一ツのおやといふものある、それあちらから火や、こちらからやゑばや、こちらから水や火やはりや、どんな道もおやがとふりた道である、それおやといふものある、はりでつか

れよが、火でたかれよふが、おやといふてみている、それおやがあるとおもて、めんく／＼どんな心もおやのりをみて、こゝろをさめるがよい。

〔梅谷文書〕 船場大教会、昭和26年、5ページ）

火や刃、水や針といった道は、どんな道もみな親である教祖が通つた道である。針で突かれようが、火でたかれようが、親である神様は見ている。親がいてくださる、教祖が通つてくださった道だと思つて、心を治めてもらいたいと、述べられている。

ほかに、次のような話が伝わっている。
加見兵四郎（のちの東海大教会初代会長）は、おたすけに熱心に歩くも、生活は苦しく、せめて子供たちだけでも、ひ

もじい思いをさせたくないとの思いから、明治19年、教祖のもとを訪ね、少々家業をさせてもらいたいとお願ひしたところ、次のようなお言葉があつた。

明治十九年九月十日、式上郡笠間村 講元加見兵四郎少々家業として被下度御願

（略）さあ／＼ いばら ぐろうもがけ道も つるぎの中もと いふてあろ どうせこうせ はいわん 心と心をしやんしてみるがよい

〔東海の道——東海大教会略史〕 昭和49年、26—27ページ）

茨ぐるうも、崖道も、剣の中もと、言つてあるだろう。どうせよこうせよとは言わないが、そのような道を歩んできた教祖のお心と、いまの自分の心を比べて思案してみるがよいと論されている。

教祖は、天保九（一八三八）年に「月日のやしろ」とお定まりになられた後、

「貧に落ち切れ」

との親神様の思召おぼしめしのままに、ご自分の嫁入り道具をはじめ、食べ物、着る物、金銭に至るまで、中山家の倉がすっかり空になるまで、施し尽くされました。それは、

「この家へやって来る者に、喜ばさずには一人もかえされん。親のたあには、世界中の人間は皆子供である」
〔稿本天理教教祖伝〕25ページ

とのお心からです。

その道中は、47―49のお歌で表現されるような難儀苦難の連続でありましたが、その中を、「水を飲めば水の味がする」〔教祖伝〕40ページ〕「貧に落ち切らねば、難儀なる者の味が分からん」〔稿本天理教教祖伝逸話篇〕「四 一粒万倍にして返す」と周囲を励ましなから、一つひとつ通り抜け、越してこられたのです。

天理王命というは、五十年前より誠の理である。

（明治21・1・8）

何でもない百姓家の出、（略）誠々々天然自然の道付く
（明治20・12・6補遺）

と言われますが、何もないところから、教祖の誠一つによって付けられたのが、この道です。教祖は、真実の生き方を、身をもって「ひながた」としてお示しくださったのです。

このような道中は、教祖のおそばでこれまで共に道を歩んでこられた秀司様が、一番よくご存じであったはず。その秀司様に対して、あらためて、教祖が通って付けてこられた道がどのような道であるのかよく思案してもらいたい、「水の味」を「難儀なる者の味」を求めて通ってもらいたいと諭されているのが、これら一連のお歌ではないでしょうか。最初から大道を通ろうとするのではなく、親神様にもたれて、細道をだんだんと越していくような行き方（※6）、神一条の道を誠一つに一步一步と通る生き方が、人間にとって、本当に意味のあるものである。教祖がこれまで通ってこられた道すがらに照らして、今は光が見えなくても「たんのう」してくれ、神が確かに連れて通ってやるから。秀司様に対して、このように諭されているのではないかと思案するのです。

一号51—57
もふこれからハもんくかハるぞ

いま、でハうちなる事をばかりなり

もふこれからハもんくかハるぞ

よろづよにせかいのところみハたせど

あしきものハさらにないぞや

一れつにあしきとゆうてないけれど

一寸のほこりがついたゆへなり

このさきハ心しづめてしやんせよ

あとでこふくハいなきよふにせよ

いま、てハながいどふちふみちすがら

よほどたいくつしたであるをな

このたびハもふたしかなるまいりしよ

みへてきたぞへとくしんをせよ

これからハながいどふちふみちすがら

といてきかするとくとしやんを

「おふでさき」写真版をみると、50のお歌を記され

たあと、紙が改められていることが分かります。

「おふでさき」は一ページに四首ずつ記されている

ことが多いのですが、50のお歌のあるページは、50のお歌だけが載っていて、後は空白になっています。三分分のお歌のスペースが空いています。50と51は詠よまれた日が異なっている、もしくは50と51の間に大きな区切りがあると考えられます。

〈文句変わる〉

51のお歌の解釈に関して、「いままでは、〴〵ち（おやしき内）のことばかり説き論してきたが、もうこれからは話題を転じて、〴〵せかい〴〵（広く世の中一般）のことについて説き論すのである」と理解することが多いように思います。つまり、50までは「うち」のことを話題にしているのに対して、51—57は「せかい」のことについて言及されているとする解釈です。

しかし、ここで考えてみたいことは、「もんくかハる」（文句変わる）とされている点です。「もんくかゑる」（文句変える）であれば、そのような解釈も自然とできるのですが、ここでは「変わる」という自動詞が使われています。

「もんくかハる」という言葉は、この箇所以外にも、

「おふでさき」で使われている言葉です。その多くは「人々の使っている言葉の表現が今までと違ったものに変化する」、つまり「これまでと事態が改まってくる」という意味で使われることが多いように思います。

たとえば、次のような用例です。

これまでハよろづせかいハ上のま、

もふこれからハもんくかハるぞ (三 12)

「これまで人々は、万事世界は、上のま」だと言っていたが、もうこれからは文句が変わって、神のまま」と言うようになる」という意味になります。

このほかにも、

このさきハとのよなゆめをみるやらな

もんくかハりて心いさむで (十六 27)

というお歌は「この先はどのような夢を見るか分からない。いままでは心がいずんでいたが、これからは文句が変わって、心が勇むようになる」と解釈されます。

「文句」という言葉を国語辞書で引くと、「文章中の語句。文言」と出てきます。おそらく「おふでさき」の中で使われている文章表現が変化することを、

「文句変わる」と記されているのではないかと思索します。

このようなことからすると、第一号51のお歌も、神が話題を変えるという意味ではなく、事態が改まってくるという意味で使われているのではないのでしょうか。前後のお歌より考えて、具体的には、「やしきの掃除」ができて、人々の心が澄んで、この「やしき」が「確かな詣り所」になってくる。このような状況を、「文句変わる」という言葉で表されているのではないかと思索します。

したがって、一号51—57のお歌についても、それまでのお歌と同様、「うち」についての話題が続いているのではないのでしょうか。

〈日々「ほこり」を払って通る〉

これまで第一号では、「あくじ」ということを切り口に、「おやしき」の人々の心を掃除すること、「やしきの掃除」ということが話題とされてきました。

厳しい表現が続いてきたこともあるのでしょうか、52から54にかけては、「この世の元初もとはじめりから現在に至るまで、世界中を見渡しても、あしきの者」は



一人もない(52)「それは心に一寸の^{ちよつと}ほこり」
がついてしまったからなのだ(53)「これから先は、
心をよく静めて思索し、後で後悔のないようにして
くれ(54)と言われています。「うち」の者に対し
て、「ほこり」を知らず識らず積み重ねるうちに、
後で後悔する結果になってくる。これまでのことを
よく反省したうえで、これからはその一寸の「ほこ
り」をゆるがせにせず、大事に通ってもらいたいと
望まれています。

教祖は、天理に沿わない心づかいを「ほこり」に
たとえられました。そして、「ほこり」を掃除し、
心を澄みきらすそのうえから、八つの心得違いを教
えてくださいました。日々、すきやかに「ほこり」
を払って通る、それは慶応二(一八六六)年に教えら
れた、

あしきはらひたすけたまへ てんりわうのみこ
と

の「おつとめ」で示されるところでもあります。

〈確かなる詣り所〉

55に「いま、て(いままで)、56に「このたび」、

57に「これから」とあり、それぞれ、「これまでの
道(過去)」「いまの道(現在)」「これから先の道(未
来)」が述べられています。

まず、55の「いままでは」は、「人間世界の元初
りから今日に至るまで」という大きな時間軸のなか
で解釈されます。

「退屈」という言葉は、一般には、「くたびれて気
力が衰えること。嫌になること」「何もする事がな
くて、暇を持って余すこと」という意味で使われるこ
とが多いようですが、国語辞書を見ると、「畏縮す
ること。おそれしりぞくこと。不安になること」と
も記されています。「おふでさき」で使われる「い
ずむ」という言葉に近い表現だと思えます(※7)。

よって、55は少し言葉を補って解釈すると、「い
ままで、人間は元初り以来の長い道すがらを通って
きている。その間、親神は修理肥としてさまざま
聖賢の教えを伝えてはきたが、旬刻限が到来せず、
人間もそこまで成人していないため、これまでは真
実の道を教えることができないでいた。よほど心を
いずませてきたことだろう」という意味になります。
それに対して、56では、「しかし、このたびはも

う確かな「詣り所」が見えてきた。だから得心をしてくれ」とあります。天保九年に、元初りの約束により、親神様が教祖を「やしろ」として表に現れて以来、三十数年間、さまざまな道中を経てきた。そして、このたびは「やしきの掃除」もできかけてきた。「みかぐらうた」において、

こゝはこのよのごくらくや

わしもはやくまゐりたい

こゝはこのよのものどぢば

めづらしところがあらはれた

と示される道が、ようやく見えかけてきたのだと言われているのです。

そのうえで、57では、これからは「長い道中、道すがら」について説いて聞かすようにするとあります。

す。「長い道中、道すがら」とは、元初り以来のこれまでの歩み、すなわち「元初りの話」を指すとともに、これから先の人間の行く末についてを含んでいると理解します。「元の理」を説いて聞かすようにするので、しっかりと思案するよう望まれているのです。

以上、51―57のお歌を取り上げました。この箇所では、「やしき」の掃除が行われ、心の「ほこり」が払われていくことによって、「おやしき」の様子がこれまでと変わり、「確かなる詣り所」となっていく。「うち」の者に対して、そのような将来の見通しのようなものを、楽しみをもって述べられているのではないのでしょうか。

※1 『おふでさき註釈』
においては、「人生の行
路」という言葉を当てて

おり、本稿ではこの表現
に従った。
※2 ただし、「みちの

しだい」といっても、「か
しもの・かりもの」の理
から思案すれば、それは、

おふでさき
の世界
を歩く



当人の心づかいや、前生からの「いんねん」によるところが大きい。

※3 以下を参照。

・澤井勇一「譬の論理——コミュニケーションのための媒材を求めて」
『天理教校論叢』第6号、天理教校本科研究室、昭和40年。

・澤井勇一「おふでさきを読む」道友社、立教161年、71—78ページ。

※4 このような道の歩み方は、「おさしづ」の中で「順序」という言葉で論されている。

「順序」については、天理大学おやさと研究所編『天理教事典 第三版』平成30年(443—445ページ)を参照されたい。

※5 「これ我が事」(50)を解釈するにあたって、

「この今論している道中は、これは我が事(自分の通って来た道中)なのだ」というように、教祖ご自身が「我がこと」を述べられていると読むこともできよう。その場合、50のお歌の解釈は、次のようになる。

「この今している話は、よそ事ではない。神が子供可愛い一条の思いからしていることであって、これは我が事(教祖ご自身)の道中)なのだ。よって、皆もこれを我が事として思案してもらいたい」
ただし、このように解釈した場合「どこのこと

ともさらに言わんで」(46)という言葉と多少矛盾することになる。

※6 「おやしき」では、神職や山伏などの反対攻撃に対処するため、慶応3年7月に、京都の吉田神祇管領に願ひ出て、認可を得ている。吉田神祇管領が廃止されたことにより、公認が無効となるのは、このお歌が詠まれた翌年、明治3年のことである。『教祖伝』97ページ、106—107ページ参照

※7 以下のお歌も、一号55と似た意味になると思案する。「これまでハいかなるみちをとふりても ひがきたらんでいづみいたなり」(六 24)